

# 日点委通信

No.32

2016年11月1日発行

## 日本点字委員会が創立50年を迎えました

日本点字委員会は、2016年7月30日に創立50年を迎えました。これまでの道のりと同様、これからも点字と点字を使うすべての人と共に歩んでいきます。これからも、日点委へのご理解とご協力をお願いいたします。

## 「日本の点字」墨字版在庫処分に伴う無償提供のお知らせ

このたび、2011年以前の「日本の点字」墨字版の在庫を一斉に処分することにいたしました。送料をご負担いただける希望者に無償で提供いたします。いずれの号も資料的価値の高い原稿が掲載されています。この機会に日本の点字の歴史の一端にふれていただければ幸いです。お申し込みには、「日本点字委員会」ホームページ内の「『日本の点字』墨字版在庫処分に伴う無償提供のお知らせ」をご覧ください。申し込み締め切りは12月末までです。

## 日点委50年記念講演会、および記念誌発行

- (1) 記念講演会開催 6月5日（日）、東京・新宿区の戸山サンライズにおいて日点委創立50年特別記念講演会が、約60名の参加者を集めて開催されました。講演者、および講演概要は下記のとおりです。

**日点委顧問・阿佐博氏「中村京太郎と点字表記」**：日本点字を翻案した石川倉次は、音そのまま表現するのが最も正しい日本語表記であるとの信念から、表音的點字表記をするための拗音點字を発表した。しかし歴史的仮名遣いに慣れた人たちから厳しく批判され、すぐには採用されなかった。表音的表記に賛成の中村京太郎は、東京盲学校の同窓会長になると点字出版部をつくり、そこで点字製作したものは全て表音的表記を用いた。1922年に創刊された『点字毎日』（点毎）で編集主任を務めた中村は、表音的點字表記を用いたので、点字表記の使用が広まることとなった。

**日本点字図書館理事長・田中徹二氏「点字とわたし」**：東京都心身障害者福祉センターに在職中、日点・点毎・東京点字出版所・日本点字研究会（日点研）で出版さ

れたものについて仮名遣い・記号・分かち書きの表記を比較した。当時はそれぞれの施設がそれぞれの規則によって表記していたため、統一がほとんどとれていなかった。日点委が1971年に『日本点字表記法（現代語篇）』を出す頃には表記はほぼ統一されたが、分かち書きについてはなかなかきちんとした規則が定まらなかった。その後、これだけ議論があるのなら『点字表記辞典』を作ったらどうかと考へ、編集した。

**日点委会長・木塚泰弘氏「日点委50年のいろいろ」:** 日点委の前身である日点研の主な目的は点字教科書の表記を統一することであったが、なかなかうまくいかなかった。そこで当時の日点研・鳥居篤治郎会長と相談し、盲学校だけでなく福祉施設にも声をかけて統一しようという話になった。各施設にも呼びかけて日点委を立ち上げた。現在、公職選挙法に載っている点字一覧表や「点字は文字とみなす」という表現の見直しにも取り組んでいる。

- (2) 記念誌発行 書名：(仮題)『むつぼしの輝きを求めて -日本点字委員会50年のあゆみ 1966～2016-』 著者：金子昭 発行時期：2016年12月までの発行を目指す。

### 日点委委員の動静について

- (1) 前事務局長・当山啓は2016年5月20日に逝去しました。享年68。当山は2002年度から亡くなるまで事務局長を務めていました。7月9日(土)に日本点字図書館と共催で「當山啓氏お別れの会」を開催しました。ご参加いただいた方に、氏の講義資料をまとめた『日本点字表記法の変遷』を配布しました。ご希望のかたに、PDF版・点字データ版をお送りします。事務局までお申し込みください。
- (2) 日点委会長・木塚泰弘は、視覚障害者の文化や教育・福祉の発展に貢献した功績により、第53回点字毎日文化賞を受賞することが決まりました。表彰式は11月15日、毎日新聞東京本社で行われます。

### 第52回総会並びに研究協議会報告

2016年6月4日(土)～5日(日)、日本点字図書館、および戸山サンライズにおいて第52回総会並びに研究協議会が行われた。委員19名、事務局員4名、会友5名、オブザーバー等24名、計52名の出席があった。

#### (1) 委員の交代について

盲人社会福祉界代表では、藤森昭委員(東京ヘレン・ケラー協会点字出版所)から小川真美子氏(名古屋ライトハウス名古屋盲人情報文化センター)に交代した。

盲教育界代表では、松尾穰司委員（青森県立盲学校）から深川亮氏（秋田県立視覚支援学校）、坂井仁美委員（愛知県立岡崎盲学校）から溝上弥生氏（愛知県立名古屋盲学校）、首藤浩委員（大阪府立視覚支援学校）から馬場洋子氏（神戸市立盲学校）にそれぞれ交代した。

(2) 「両界代表委員協議会において、事務局員の和田勉氏を新たに学識経験委員として選任した」旨の報告があった。

## □総会

- (1) 和田勉委員が事務局長として推薦され、承認された。
- (2) 2015年度事業・決算報告、各地域委員会報告、2016年度事業計画・予算案などが討議され承認された。
- (3) 創立50年記念事業として、記念講演会の開催と記念誌の発行が承認された。

## □研究協議

### 1. 「日本点字表記法」改訂版編集委員会からの中間報告

編集委員長より、下記の報告があった。あり方検討委員会、「表記法」検討委員会の答申をどのように表記法に具体化するか、検討を進めている。答申に含まれていないことでも編集委員会で必要と思ったことは審議している。

1章は、2章～5章の全体ができてから検討する。

今回は、2章・3章を中心に中間報告を行う。

4章・5章は、原稿は作成しているが議論が深まっていない。ここでは4章のうちの2点について議論していただきたい。

「表記法」全体の章立てについて。1章～5章は表記法の流れを変えず、現在のままと考えている。古文・漢文については、1章～5章が終わった後で検討するが、現在のところ、大きく変えるべきだという意見は出ていない。

第2章について変更案の主なポイント、および第2章（案）に基づいて報告と意見交換が行われた。促音化の抑制、ローマ数字をアラビア数字で書いてよい場合の表現、などについて意見があった。

第3章について変更案の主なポイント、および第3章（案）に基づいて報告と意見交換が行われた。接頭語や接尾語などについての用例、語種や文字数の扱い、などについて意見があった。

第4章1節 スラッシュについて説明が行われた。外国語引用符の中では「④⑤⑥

ヤ」、日本文の中では「⑤⑥ヤ」、外文字符の中では「ヤ」の3種類使用している。前に続け、後ろをマスあけするようにした。

これについて、「スラッシュはあった方がよい」「前もマスあけした方がよい」などの意見があった。

4章6節 行移しについて、検討の材料として試案が示された。「行末が不自然に大きくあいて違和感を感じる時、とは何マス以上か」という問いに、提案者より「その人の感覚で感じて欲しい。1つの答えにならなければいけないわけではない」旨の発言があった。

これからの進め方について、編集委員長より下記の発言があった。

2章・3章については、この研究協議会で議論いただいたことをもとに検討し、来年、原稿を提出したい。4章・5章については、来年までに原稿を完成させたい。古文・漢文についてもどうするか検討する。各地域に持ち帰って検討されたことは、編集委員会にお寄せいただきたい。

2. 文中注記符について、次のような意見交換があった。「前置きしたい場合があるのは事実だろうが、原本に忠実にする必要…という表記法の表現とは異なる理由ではないか」「前置きすることのデメリットもあり、どちらかを標準にするなら後ろ置きがよいのではないか」。この件は、編集委員会の討議に反映させることとした。

3. 外文字符と外国語引用符の使い分けについて、近畿点字研究会より、外文字符の使用拡大を意図した具体的な提案が改めて行われた。これについて意見交換が行われ、各地域、および「表記法」編集委員会において議論することとした。

4. オブザーバー江藤昌弘氏より「表記改定に関する要望事項」について、木塚泰弘委員より「ニッテンイノ キホン ホーシン」について、それぞれ説明があった。

### 日本点字委員会事務局

〒169-8586 東京都新宿区高田馬場1丁目23番4号 日本点字図書館内

電話 03(3209)0671 FAX 03(3209)0672 振替口座 00100-1-42820

ホームページ <http://www.braille.jp/>